

この話は、だれにも言っていない。

けど、あたしたちは覚えている。この世界にはじめて生まれた日のこと。

みどりの中に、たくさんのきらきらが光っていた。

風といっしょに、よい香りがはこばれてきて、あたしたちをつつんだ。

いつも暗がりのむこうからきこえていた、ずっとあいたかった、あたたかい声もした。

それが森の中だったってことは、後でとうさんとかあさんが話してくれた。

あたしたちはまだ、あまりよく見えなかったから。

それでも、これだけはすぐにわかった。「ここは、やさしくて、うつくしい世界」

長いあいだ、あたしたちの家は馬車だった。いつも、どこかからどこかへ動いていた。

木みたいに根っこのある家にずっとくらし、「ガッコウ」にいくのってどんなかな。

ときどきそんなことを考えた。おなじ年ごろの子どもたちが、ちょうちょみたいにパタンとひらく紙をもって行く場所のこと。なかにはいろんな「ものがたり」がしまわれている。

あたしたちのおきてでは、「ものがたり」はとじこめてはいけない。

夜、おとなたちが火のそばで歌うものがたりなら、いっぱいしってる。ふれたものが、ものがたりをきかせてくれることもある。川や、古い木や、水にうかぶ花のなかにだって、あたしたちはものがたりを読むことができる。それを、とうさんのギターにあわせて、うたう。おとなたちは、よろこんでくれる。

「空は、わたしたちの屋根。星は、わたしたちのランプ。歌を織りあげ、空にかけよう。

わが家を美しくかざるように」

夜。パチパチはねる火のむこうで、とうさんは歌う。一族につたわる、古い歌だ。

それにあわせて、かあさんはおどる。かあさんの動きにつれて、スカートがゆれる。おどっているとき、かあさんの手はとつてもやさしい。まるで、とりのはねみたい。

あたしたちはあんしんして、ねむることができる。

でも、ある日、あたしたちの馬車はとおせんぼされた。あの線から先にはいっちゃだめ。根っこのはえた家にすむこと。「ガッコウ」へもいくこと。とうさんも、かあさんも、しぶしぶいわれたとおりにした。

とうさんは、土をたがやし、母さんは森でとれた薬草でお茶をつくって売るようになった。

あたしたちはわくわくして「ガッコウ」にいった。ちょうちょの紙にかいてあるひみつも知りたかった。

でも、よその子たちは、あたしたちを「まじょ」ってよんだ。石や、たまごをぶつけてくる大人もいた。

だから、「ガッコウ」にはいかず、森ですごすようになった。たまごで頭がべとべとになるのはいやだったけど、根っこのはえた家でくらすのは、わるいことだけじゃなかった。

馬車でくらすなくなつて、空はあたしたちの屋根だし、星はあたしたちのランプだ。

まいにち同じ森にいて、すこしずつ森ともだちになるのも、たのしかった。

いつも同じ場所でいちごやきのこがとれることもわかったし、春にうまれた赤ちゃんのしかが、だんだん大きくなっていくのを見ることもできた。

ここにくらすのも、すてきだよ。あたしたちは手をつないで空をみていた。

うすく目をとじると、まぶたのおくに、きらきらが見えた。ちょうどあたしたちが生まれた日のように。

森はずかでやさしかった。そんな朝に、「あれ」がやってきた。